千年にわたる芝草原を未来へつなごう

安比高原ふるさと倶楽部の芝草原復元活動

安比高原は昔、馬や牛が放牧され、芝草原やレンゲツツジが見渡す限り広がっていました。しかし、時代とともに馬が減少し、草木が生い茂り、美しい草原の姿が失われてきました。昔の姿を取り戻そうと、安比高原ふるさと倶楽部が芝草原復元活動に取り組んでいます。

芝草原復元活動によりレンゲツツジと野芝の草原が徐々に復元されてきた安比高原「中のまきば」（平成28年６月10日撮影）

千年続いた広大な芝草原

安比高原は、およそ千年前の平安時代から、馬や牛が放牧されていたといわれています。馬は、山から切り出された木々や荷物を運搬したり、田畑を耕すために利用されたりと、農業・林業で重要な役割を果たしていました。放牧された馬や牛は、伸びる草木をはみますが、有毒植物のレンゲツツジは食べません。広大な芝草原とレンゲツツジの景色は、馬や牛の放牧により維持されてきました。

戦後になると、農作業の機械化や軍馬としての需要がなくなったために馬が減少し、放牧が行われなくなりました。安比高原の広大な芝草原は、周辺に成育していた樹木や笹の侵入により成長が阻害され、減少していきました。

現在は、牛や馬の姿はなく、人の手によって草刈りが行われています（奥のまきば）

昔は、牛や馬が放牧され、芝草原が広がっていました（奥のまきば）

課題が山積した復元活動

「このままでは芝草原が消えてしまう」。危機感を抱いた地域住民の要望を受け、平成18年に市と森林管理署が「あっぴ高原遊々の森」協定を締結し、その活動の一環として地域住民とともに、侵入してきた草木の刈払いや野焼きなどを実施しました。しかし、自然の再生力は力強く、作業をしても翌年にはススキが生い茂り、ススキ野原となってしまいます。労働力や費用、時間などの課題が山積し、人の手では限界がありました。

毎年の秋に行う刈った草木を燃やす野焼き

馬を利用し芝草原復元へ

平成24年４月に地元の有志によって安比高原ふるさと倶楽部が設立され、芝草原復元活動の業務を引き継ぎました。さまざまな課題に対して同倶楽部は、馬を利用した再生プロジェクトを立ち上げます。この活動は、芝草原を再生するだけではなく、馬に芝草原の再生という仕事を与え、減少しつつある在来馬を残そうという取り組みでもありました。

始めに馬を放牧するため、約９００トンに渡り牧柵を建て、４・６ヘクタールのまきばを造りました。26年には試験的に５頭の馬を１カ月間放牧し、27年には４頭の馬を５カ月間放牧しました。馬は順調に草を食べ、草木の繁茂を抑えました。

28年には、さらに牧柵を建て、まきばは最初の時の約７倍（33・３ヘクタール）まで拡大します。芝草原復元活動は効果を上げ、中のまきばは、昔の広大な芝草原やレンゲツツジが咲く景色を徐々に取り戻してきました。

牧柵を建て、馬の活動区域を広げます

安比高原ふるさと倶楽部　会長
関　善次郎さん（69歳）＝兄川＝

芝草原に人々が訪れ、笑顔で過ごせるように

６月初旬の安比高原「中のまきば」は、レンゲツツジが満開になり、馬が放牧されていますので、ぜひ子どもたちにも訪れてほしい。馬や花を見たり、小川で遊んだり、芝生で走り回ったりして、千年続いてきた里山文化の風景を感じてほしいと思います。私には孫がいますが、安比高原に連れて行くと笑顔で喜びます。

安比高原ふるさと倶楽部は芝草原復元活動を行っていますが、多くの人の支援が必要です。ぜひ、ふるさと倶楽部に参加していただき、活動の支援をお願いいたします。

「安比高原ふるさと倶楽部」とは

安比高原ふるさと倶楽部は、「あっぴ高原遊々の森」（奥のまきば・中のまきば・ブナ２次林）を中心に安比高原の貴重な財産である自然環境を次世代につなぐため、保全と整備を柱とした事業を行っています。

さまざまな実践活動を通じて人と人が交流する場を構築し、地域資源活用型観光地を考え実践する団体です。在来馬の放牧による草原の管理のほか、地元の学校での環境教育、自然解説、散策路の管理なども行っています。

現在は、市内外や首都圏からの会員を含む11団体と５家族、個人62人で活動しています。

安比高原ふるさと倶楽部 会員募集・寄付のお願い

安比高原ふるさと倶楽部では、会員を募集しています。また、環境保全への寄付を募っています。ご協力をお願いいたします。

■入会金　個人会員　1,000円

■問い合わせ先　安比高原ふるさと倶楽部事務局「イーハトーヴォ安比高原自然学校内」（☎73－6228）